

【研究主題】「自分らしく生きる 豊かに生きる」力の育成を目指して

【副題】～みはまコミスクと共に、『美浜町（ちいき）で育つ みはまの子』の実践～

【学校・団体名】和歌山県立みはま支援学校

【役職名・氏名】校長 岡 潔

1 はじめに

全国の特別支援学校におけるコミュニティスクール導入率が45%という中、本県では平成29年度から県内全ての公立学校に導入された「きのくにコミュニティスクール」の取組もあって、各校における特色ある活動が進められている。

また、学習指導要領の総則においても「社会に開かれた教育課程」や「家庭や地域社会との連携及び協働」を深めることが明記されている。県立特別支援学校は校区が広く、連携・協働していく地域をとらえにくい一面があるが、特別支援学校が立地している地域とのつながりを大切にし、児童生徒が地域資源を活用し、多様性が生かされる学習を展開していきたいと考える。

2 学校の概要と児童生徒の実態

本校が立地する美浜町は、和歌山県の中部、日高郡の西端に位置し、全長約4kmの松林をもつ県立自然公園「煙樹ヶ浜」は、紀伊水道に面している。

本校は、昭和54年、和歌山県唯一の病弱教育を行う養護学校（特別支援学校）として、独立行政法人国立病院機構和歌山病院に隣接して開校した。病類は、脳性まひ、難病疾患、精神疾患など多岐にわたっている。近年は、発達障害等に起因する社会不安障害や適応障害などの二次障害を有する心身症等の児童生徒が増加し、県内各地から公共交通機関等を利用し、通学している生徒が9割近くになっている。目指す学校像は、「一人一人が大切にされ 安心して過ごせる学校」、目指す子ども像は、「自分らしく生きる 豊かに生きる」である。

長期にわたって入院している重度重複障害児（重心児）は生活における制限も多いことから経験不足であり、心身症等の児童生徒は、傷つき体験より自信を喪失し、大人や社会への不信感が見られる。共通して言える児童生徒の課題は、経験不足と気持ちを表出する力（コミュニケーション）の弱さである。

令和5年度に、コミュニティスクールとの協働で実現したいこととして2点を挙げている。

ア 学校生活を通じて、小さなことでも「認められた」

という経験ワクワクする体験を重ね、「自分は自分でいいのだ」という気持ち（自己有用感、自己肯定感）を育てる。

イ 本校を卒業しても、安定してステップアップし、よりよい生活を送ろうとする意欲と態度を育む。

令和5年度は、キャリア教育の充実を目的に、美浜町中央公民館と連携した常設作品展示や缶バッジワークショップの実施、野外音楽会やチョコレートワークショップなどのほんもの体験を実施した。また、学校運営協議委員会による学校設定科目「産業社会と人間」における連載授業（年8回）も実施できた。



公民館に常設展示



缶バッジワークショップ

3 コミュニティスクールの活用構想

(1) プロジェクト『美浜町（ちいき）で育つ みはまの子』の立ち上げ

令和6年度は、本校をもっと地域に知ってもらい、地域に根ざした実践を展開していくためには、以下の二つの視点が必要になると仮説を立て、プロジェクトを進める。

① 地域から学ぶ

児童生徒も教員も地域のことを知らない現実がある。社会のつながりの中で学ぶ、地域の人から学ぶ機会を設定する必要がある。

② 地域で育つ

児童生徒が学びを発信する機会や地域貢献する機会を設定する必要がある。地域での活動は児童生徒の自信を育てる。

(2) 教職員と学校運営協議会委員で企画・授業作り

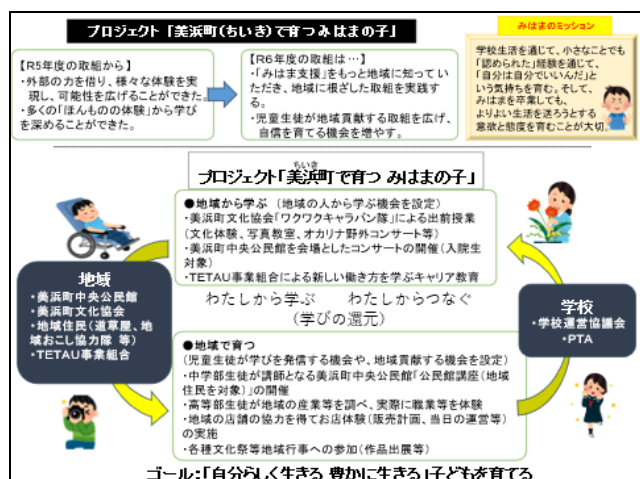
コミュニティスクールの要は授業であることを踏まえ、学校設定科目等の授業作りの段階で、学校運営協議会委員にアイデアを求め、教科横断的に構想をまとめていく取組を行う。

(3) 学校運営協議会委員やその活動を周知

学校運営協議会は学校の応援団であると伝えているが、各委員のことが児童生徒や保護者に浸透していない現実がある。みはまコミュニティスクールのPR活動を展開する。

4 実践内容

(1) プロジェクトの具現化



①高等部学校設定科目「産業社会と人間」の授業作り

「産業社会と人間」の学習目標は、「自己理解を深め、働くことや職業、現代社会の諸問題について学習すること、将来の生き方や進路について考える」である。令和5年度から、マーケティング関係者でもある運営協議会A委員による連載講座という形で実施してきた。さらに令和6年度は、身近な地域(美浜町)に住む魅力的な人をゲストとして招聘し、「生き方・在り方」について生徒と語り合う取組を進めた。

町内に住む魅力的な人物リストの作成については、公民館の社会教育主事であるB委員が担当し、コーディネーターとしてとして地域と学校をつないで頂いた。令和6年度は、胡蝶蘭生産者、デザイナー、地方創生事業者、地域おこし協力隊員、住みます芸人を本校に招き、話を伺った。ゲストの高校時代の話や失敗談、転機となるエピソードや自分の支えとなっている言葉など生徒たちの心に響く話を聞くことができた。



ゲスト：胡蝶蘭生産者

ゲスト：デザイナー

②松林の清掃活動計画から実施、振り返りまで

令和6年度5月の生徒会役員と校長とのランチミーティングで、地域のために自分たちができることという話の中で、日ごろの恩返しとして松林や煙樹ヶ浜をきれいにしたいという意見が出た。

この提案を第1回の学校運営協議会の協議テーマにしたところ、地元中学校長のC委員から「松林の歴史等を学んでから取組を進めてみては」という意見を頂き、公民館のB委員から美浜町農林水産建設課に相談することを進められる。その後、美浜町おはなし出張講座を活用し、役場の方による松林についての学習会を開催することができた。

第2回の学校運営協議会では、この清掃活動を児童生徒たちの主体的な取組にするために協議が行われた。大学教員のD委員からは生徒会が当日の進行役を務められるようにという意見があり、PTA会長のE委員からはPTA研修会の後で生徒会から協力依頼をしてみてもいいかという意見があった。また、C委員からは、役場の協力を得て一か所にゴミを集め達成感を共有できるように工夫する点も挙げられた。

松林の清掃日が11月12日と決まったことで、生徒会はチラシを作成し、PTA研修会で参加保護者に呼びかけを行った。各家庭にもチラシが配布された。

清掃活動当日は、多くの保護者が参加し、たくさんのゴミを回収することができた。参加した生徒からは、「大量のゴミが出てきた」「やってよかった」「まだやれた、心残り」「保護者がたくさん来てくれてよかった」「松林は地域を守ってくれている」「来年も続けた方がいい」など次につながる声が聞かれた。

第3回学校運営協議会で、生徒会の役員2名が、松林清掃の取組について報告を行った。報告を終えた生徒の感想は、「緊張しました。こうやって自分たちの活動を知ってもらえてうれしい限りです」「初めて、発表するので、緊張したけどうまくいったと思います」と述べていた。



ランチミーティング



松林清掃活動を報告

③公民館講座「缶バッジワークショップ」

本校中学部では、自立活動の時間に、「障害による学習上または生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること」「集団への参加の基礎に関すること」「状況に応じたコミュニケーションに関すること」などの項目から、各自の目標を設定し「ものづくり」という学習活動を設定している。公民館のB委員の支援もあり、令和5年度より、地域住民を対象とする公民館講座に本校中学部生徒による「缶バッジワークショップ」を組み込んでもらっている。普段のものづくりの取組では、生徒同士が協働して活動することはあっても、自分が「教える」立場になることはほとんどない。一般の住民の方にどう伝えたらよいのか、不安を感じる生徒も多い。指導役という体験を通して、オリジナルの缶バッジを完成させることができたときの喜びを共有したり、感謝されたり、参加者の反応から達成感と自己有用感を味わえる機会となっている。

令和6年度には、缶バッジワークショップは、県の障害者のための生涯学習支援者派遣事業（出張学び講座）にも登録された。

令和6年度も12月に公民館で缶バッジワークショップを開催した。今年度は、待ち時間に住民の方との雑談タイムも設け、作業工程以外のふれあいの時間を設定した。生徒たちも丁寧な言葉遣いを選んだり、「うまいじゃないですか」など相手を褒める言葉を出せたり、年配の参加者にもペースを合わせて説明したりすることができていた。参加した地域住民の方からの感想は以下のとおりである。

- ・オリジナルの缶バッジができて良かったです。子ども達も楽しく丁寧に教えてくれて完成しました。良かったです。
- ・初めての人と話すのは緊張したかと思いますが、とても丁寧に教えていただきました。
- ・講師の中学生の教え方・ほめ方が上手く、気持ちよく作業ができました。ぜひ継続して取り組んで下さい。
- ・すごくきれいで簡単にできたので良かったです。作り方も優しく丁寧に教えてくれました。来て良かったです。
- ・皆さんと楽しい時間でした。缶バッジを大切に使いたいと思います。生徒さんと先生方とのいい距離感、関係がこちらにも伝わってきました。また、機会があれば何かの形で参加したいと思います。
- ・子ども達の説明もわかりやすかったです。みなさん、親切にありがとうございました。



缶バッジワークショップ



雑談タイム

④近隣の保育所での取組

高等部3年生が、学校設定科目「生活と福祉」の中で、近隣の保育所に読み聞かせ活動を行った。事前に園児との交流会を行ったり、県立紀南図書館の読書を楽しむ習慣づくり事業高校生向け講座を活用し、読み聞かせや紙芝居のレクチャーを受けたりしての実践である。生徒たちが前に立つと園児たちは、大型絵本や紙芝居を食い入るように見つめている。園児たちが集中して見てくれるのもうれしいし、反応も楽しいという感想もあり、園児を楽しませることを通して達成感を味わえた取組であった。



読み聞かせ活動の様子

⑤オカリナコンサート

隣接する和歌山病院に入院している重度重複障害児は、生活に制限を受けており、外出もままならない。音楽が好きな児童生徒が多いこともあり、ほんまものの演奏を聴かせてあげたいと考えていたところ、公民館のB委員から、美浜町文化協会「わくわくキャラバン隊」の中に、オカリナの生演奏を聴かせてくれるチームがあることを教えて頂いた。早速依頼したところ10月に病院の敷地内でコンサートを開催してくれることとなった。オカリナの心地よい音色を入院生たちは楽しむことができた。



オカリナの演奏を聴く

5 成果と課題

(1) 成果

プロジェクト『美浜町（ちいき）で育つ みはまの子』は、地域から学ぶ視点と、地域で育つ視点を取り入れ、学校運営協議委員の力を借りながら、生徒会活動や授業づくりにその意見を取り入れ具体化することができた。特に、地域のことも学校のこともよくわかっているコーディネーター役である公民館のB委員の存在が大きい。地域と学校をつなぐキーパーソンとなり、紹介していただいた地域の人材資源は、本校の取組を大きく広げた。地域とのつながり進んだことにより、地域の多くの人の目（関心）が学校や児童生徒に注がれ、特色ある学校づくりも進められたと言える。

また、学校課題や児童生徒の共通課題を分析し、めざす子ども像を共有しながらコミュニティスクールを進めることができています。学校運営協議会には、管理職以外の教職員も多く参加しており、学校運営協議委員に直接依頼することもできています。今年度も町内の「魅力ある人物リスト」を作ってほしいと会議の場で教員からB委員に依頼したところ、近日中に人選、紹介して頂き、授業のゲスト交渉、打ち合わせに入ることができた。生活経験が少ない本校児童生徒にとっては、外部からもたらされる刺激は魅力的で有効的な学びとなっている。

生徒会の提案から松林清掃を実現させた取組や缶バッチワークショップで中学部生徒が講師役を務めた取組などは、主体性が発揮され、達成感や自己有用感を感じ得る活動となった。

園児から老人まで地域の異年齢の人とのかかわりやコミュニケーションも自己肯定感を育んでいる。自信となった取組は「次も頑張ろう」という意欲につながり、後輩たちにも確実に継承されている。

(2) 課題

本校のコミュニティスクールの実践は、「地域とともにある学校」を目標に駆け出したばかりである。地域から何を学ぶのか、学校は地域に何ができるのか、等思い巡らせながら、児童生徒の自己実現を支援する一助になりたいと思っている。コミュニティスクールを学校全体のものにするため、学校運営協議会委員の存在を児童生徒や保護者に周知する取組も行ってきた。学校広報であるマンスリータイムに委員一人一人紹介コーナーを作り、事あるごとに学校に足を運んで頂き

児童生徒に紹介してきた。保護者向けの研修会でもA委員を講師として、テレワークなどインターネットを使った働き方について、実習体験も入れながら話をしていた。それでも年度末の保護者の学校評価では、学校運営協議会の取組について「あまり知らない」という回答（35%）があった。今後、さらなる広報の工夫が必要である。

また、委員の中で、学校運営協議会という言葉が堅いのではという意見もあり、オリジナルの名前を委員たちで検討を行った。次年度からは、「みはまコミスク Team shiyora（しよら）」を使用していくことが決まっている。このチーム名には、みんなでやっぺいこうという意味が込められている。また、マーケティング関係者でもある運営協議会A委員に、チームのロゴの作成もお願いし、活用していく予定にしている。まずは、保護者向けにチラシを作成し配付したいと考えている。



みはまコミスクのロゴ

6 おわりに

自校の課題を明確化し、課題解決のためにコミュニティスクールをどのように活用するのかを実践しながら検証してきた。生活経験が少なく、表現力も弱い児童生徒であるが、地域の方とのふれあいが大きな経験となり、人とのつながりの中で成長していく姿を見ることができた。

学校は、カリキュラム、授業が要であり、そこに学校運営協議会の委員が関わっていく必要がある。児童生徒たちがどんなことを学びたいのか、教員がどんなことを教えたいのかを把握し、一緒に授業づくりに参加してもらいたいと考える。そこには、十分な打ち合わせの時間もあり、授業後の評価や改善も展開していく必要がある。

本校が立地する美浜町は、地域資源や人材も豊かで、協力的な点が恵まれている。コミュニティスクールを学校の特色の一つとして、今後も実践を続けていきたい。たとえ校区が広い特別支援学校にあっても、学校と地域がつながり連携・協働した取組は、児童生徒の未来、共生社会の実現につながっていくと信じ、今後も推進していきたい。

【研究主題】子供とともに育つ探究的な教育課程の在り方

【副題】総合的な学習における教師の願いと子供の思いを接続する実践的アプローチ

【学校・団体名】和歌山県和歌山市立有功東小学校

【役職名・氏名】教諭 神崎 和広

1. はじめに ～有功東小学校の研究の概要～

近年、子供の発達や学力の在り方は、単なる知識の習得にとどまらず、「自ら課題を見つけ、他者と関わりながら、解決に向けて粘り強く学ぶ力」へと大きく転換しつつある。現在、中央教育審議会においては、次期学習指導要領改訂に向けた教育課程の在り方が審議されており、これからの時代にふさわしい学びの実現が喫緊の課題となっている。これからの教育には、子供達が予測困難な社会の中で自立的に生き抜くために必要な資質・能力の育成が求められている。

現行の学習指導要領においても、「見方・考え方を働かせ、生活や社会に生きて働く力を育てること」が重視されており、今後の教育課程づくりにおいては、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現が重要な柱となる。その実現のためには、画一的な教育ではなく、子供の実態や学校・地域の特性を踏まえた柔軟で創造的な教育課程の構築が不可欠である。

こうした中で、子供の発達を的確に見取りながら、学校や地域の実態を生かした教育課程をいかに構築し、実践していくか。その手がかりを求め、有功東小学校（以下、現任校）では「子供が自らの世界を拓く学習」を研究主題に掲げ、生活科・総合的な学習の時間を核とした授業実践、授業研究に取り組んできた。

現任校では、子供一人ひとりの「思い」や「願い」から学びを出発させ、地域とのつながりの中で実体験を重ねながら、「自分達にできること」を考え、仲間と協働して課題の解決に挑むカリキュラムを担任各自がそれぞれを構成している。

本報告では、こうした実践の一端として、5年風組における小単元「収穫したお米で地域へ発信」に焦点を当て、子供主体の教育課程づくりの在り方について考察し、今後の教育課程の在り方に対する一つの示唆を提案したい。

2. 総合的な学習の時間の現状と課題

総合的な学習の時間（以下、総合的な学習）は、小学校学習指導要領において共通に教えるべき内容が明示されておらず、「ねらい」のみが示されている。そのため、教員は地域や学校の実態を踏まえ、自らカリキュラムをデザインする必要がある。また、学習内容や

方法の検討だけでなく、評価計画を立て、特色ある学習活動を構想・実践しなければならない。

学習の場は学校内にとどまらず、地域に出向き、人々と関わりながら学ぶ活動も多く含まれる。こうした実践には、教科学習とは異なる視点や力量が求められる。しかし近年、教育現場ではベテラン教員の退職と若手教員の増加により、年齢構成が大きく変化し、かつてのように若手を支える体制が十分に機能しなくなっている。中央教育審議会答申（2022）¹でも次のように指摘されている。「今後の研修の在り方について、教師の学びに充てられる時間が限られる中、一律ではなく、より高度な内容も含めて個々の教師の個性に応じた個別最適な学びが求められる。」

こうした状況を踏まえ、「校内研修体制の見直し」と「同僚間をつなぐ仕組みづくり」によって、現任校の実践がより充実するのではないかと仮説を立て、授業研究を進めてきた。

以下では、2024年度・5年風組における総合的な学習の実践と本時の授業記録、授業および単元の考察を通して、教師の願いと子供の思いを接続しながら育まれる「子供とともに育つ探究的な教育課程」の在り方について提案する。

3. 5年風組 総合的な学習の概要

5年風組では、2024年度の総合的な学習において、「農業へ挑戦！～田んぼから和歌山の魅力を発信しよう～」を年間テーマとし、以下の6つの小単元で構成し全70時間の総合的な学習を計画し実践した。【表1】

【表1. 年間の小単元構成 5年風組総合的な学習】

- ①今までの総合をふりかえろう
- ②コメ作り、野菜作りに挑戦
- ③より良くお米を育てるためには？
- ④稲刈りをしよう
- ⑤収穫したお米で地域へ発信（本時）
- ⑥学習を発信しよう



本単元では、米作りや野菜作りなどの実体験を通して、地域と連携しながら六次産業化の仕組みを学び、自らの思いや願いを実現する学習構成となっている。

提案する本時は、小単元「収穫したお米で地域へ発信」を対象としている。子供達は、自分達で育てた米

を使って生産・加工・販売・発信の計画を立て、地域イベントや授業参観で販売を行った。最終的には、地域の特産品を使ったお弁当の開発を見据えて学びを進め、おにぎりの販売、お弁当の販売活動を行った。

この学習を通して、農業や食文化、六次産業とのつながりを実感しながら、「自分達にできること」「地域に働きかける意義」について主体的に考えることをねらいとしていた。

4. 授業記録と考察：

子供が本気になる「問い」を設定できたか

本時では、販売に向けておにぎり作りを探究していた子供達が、和歌山産の具材がメニューにないことに気づいたA児の作文「和歌山の特産品を使ったおにぎりを加えるべきか？」をもとに課題を設定し、「地産地消をしたいが、和歌山の具材は人気がないかもしれない」という意見から、販売活動の方向性を話し合った。

子供達は、「人気の具材を選ぶか」「地域の魅力を発信するか」という価値観の間で葛藤しながら意見を交わした。特に、O児の「新しいメニューにするか、既存のメニューに和歌山の要素を組み込むか？」という発言から、議論は「推すことの意味」の再定義へと発展した。【表2】

【表 2. O児の発言による授業の展開】

授業記録より抜粋

O：ぼくは和歌山を推すか推さんかも関係するけど、そもそも今作ってるメニューに和歌山の具を入れるのか、新しいメニューを作って和歌山を推すのかで迷っています。

P：推す意味に何があるんですか

O2：地産地消 P：OK

t6：Oくんがいったこと分かる？

B2：Oくんは今ある具に和歌山産の具を入れるか、新しく和歌山産の具を入れたメニューをやるのかで悩んでる。

t7：言ってる意味分かった。Oくんは何を悩んでるの？

O3：なんか、今、作ってるメニューで人数は成立してるから、新しくできたメニューでみんなそこに入るんか。 c：ああ～。

t8：どうする？圧倒的に推すが多かったけど。

c：今のメニューで推せるやつを推したら？ グループで話そう。

これまでの議論は「推すか推さないか」に焦点が当

てられていたが、O児の発言から、クラス全体が「どの方向で和歌山を推すのか？」について改めて考え始めた。そして、子供達から「グループで話し合う」との要望があり、おにぎりの具材そのものだけでなく、「地産地消」「地域のお店」（ライスガーデン）「六次産業」など、広い視点で考える機会となった。【表3】

【表 3. Q児の発言による授業の展開】

Q：私はそもそも和歌山県を推さなくても、ライスガーデンさんを推せばいいと思う。ライスガーデンさん直伝みたいにして、例えば、地域の店が喜ぶからライスガーデンさん推しにしたらいいと思う。

c：ライスガーデンさんを知らん人はどうするん？

c：知らん人のために押すんじゃないん？ 1回Qの話し聞こ

Q2：そしたら、ライスガーデンさんの宣伝になるからお礼がしたい。 ～中略～

X：Aが困ってる事で、推したい理由がAは地産地消で推したいって言ってたけど、メニューが不人気っていう理由で困ってるから、それなら、六次産業を推せばいいと思って、実際に5年生達がみんなで作って加工して販売を目指してるのは六次産業だからそれを推せばいいと思いました。

さらにQ児は授業の終末のふりかえりで、自分なりの考えを深め、関わり合いを通して意見が深化する場面が見られた。【表4】

【表 4 Q児ふりかえりの発言】

Q4：私はXさんの意見で考えが変わりました。ライスガーデンさんと六次産業を推せばいいと思いました。 訳は新聞記者さんが来てくれればライスガーデンさん直伝で伝えることも出来るし、六次産業の事も新聞に載ればアピールできるので、六次産業とライスガーデンさん推しにすればいいと思いました。

Q児は「地域のお店を推すことで、感謝や協力関係を表せる」と主張し、地域との関係性を軸にした新たな視点が共有された。また、X児は「和歌山を推す本質は六次産業そのものにあるのでは」と指摘し、学びの核心に迫った。こうした発言を受け、学級全体の議論は「和歌山を推す」という一見シンプルな問いから、「自分達は何を発信したいのか」「何を学んできたのか」といった探究的思考へと深化していった。

藤井（1996）^{24）}は「問題解決学習とは、自分なりに考える力を育てること」と述べている。子供達が自ら問題に取り組み、他者と関わり合いながら考えを深め

る経験は、主体的な学びを促す。問題が具体的で現実的であるほど、子供達はその解決に意欲的に向かうようになる。また、問題解決学習は知識の獲得にとどまらず、価値観の形成や社会参加も促進する。

本時では、O 児の発言をきっかけに Q 児が問題と主体的に向き合い、考えを深め、意見が他者との関わりの中で広がっていく場面が見られた。これらから、本時の課題は、子供達にとって本気で考える価値のあるものであったと考えられる。一方で、「推したいけど推しにくい」というジレンマが共有され、「和歌山の具 vs. 人気の具 vs. 六次産業 vs. 地域のお店」と意見が拡散し、結論は持ち越された。背景には、「推す」ことの定義が曖昧だったことがある。

第 27 回近畿地区小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会和歌山大会（以下、近生総研）で奈須氏は、「授業をまとめる必要はない。子供一人ひとりの思考にはディテールがあり、それを大切にすべき」と述べた。長岡（1986）ⁱⁱⁱも、「真に教えるとは、子供を探ることの中にしか成立しない」と述べ、子供の思考を探り続ける姿勢の重要性を訴えている。授業をまとめるべきか否か、その答えは子供の中にあり、思考を探り、とらえ直す過程の中で見えてくるのだと本時を振り返っている。

5. 単元全体の考察：

子供が探究し続ける単元構成であったか

本単元は、現任校で取り組まれた既存の実践を参考にしながら、子供の思い、教師の願い、教材の特性を加味しながら、年間 70 時間の単元を組み、教科横断的な学びが起ころうかを吟味し教育課程を編成した。本項では、『探究し続ける』単元構成であったか「本単元の成果と課題」の視点から考察する。

5.1 「探究し続ける」単元構成とは

小学校学習指導要領において、探究課題の条件として以下の 3 つの要件が示されている。【表 5】

【表 5. 探究課題に求められる 3 つの要件】

- | |
|---|
| ① 探究的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしい課題である事 |
| ② その課題をめぐって展開される学習が、横断的・総合的な学習としての性格をもつ事 |
| ③ その課題を学ぶことにより、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく事に結び付いていくような資質・能力の育成が見込めること |

探究課題を設定する際には、【表 5】に示された 3

つの要件を意識し、子供達が探究的に関わりを深める対象（人・もの・こと）を適切に選定することが求められる。また、探究課題の設定においては、次の 3 つの視点を考慮し、子供達が探究的に関わる対象を具体的に示すことが重要である。【表 6】

【表 6. 探究課題】

- | |
|---------------------------|
| ① 現代的な諸課題に対応する 横断的・総合的な課題 |
| ② 地域や学校の特色に応じた課題 |
| ③ 児童の興味・関心に基づく |

本単元は、③「児童の興味・関心に基づく課題」から学習材を設定した。また、学習材から何を学ぶことができるのか、その本質に探究する価値があるかどうかを吟味し、単元の構想を練るとともに、学習材の価値分析を行うことで、子供が探究し続ける単元構成が成立するのだと提案したい。

5.2 探究し続ける単元構成として適切であったか

本単元は、2023 年度に 5 年生が実践したカリキュラムを参考に、高学年の教員で協議を重ね、6 つの小単元からなる新たな構成へと再編したものである。教師の思いや願いが異なれば、子供の学びの姿も変化するという前提に立ち、昨年度の実践の蓄積を踏まえて単元の見通しをより明確にする意図があった。

長野県伊那市立伊那小学校では、40 年以上にわたり、総合学習と総合活動が継続的に行われ、単なる教育方法の継続にとどまらず、学校文化として定着している。教師同士が学び合い、単元を共に作り上げる風土が形成されているのである。平野（2022）^{iv}は、同校の実践を次のように評価している。

「伊那小学校の研究においても、教材研究や情報交換を通じて実践を深める文化が根付いており、単元設計の柔軟性が重要視されている。」

また、奈須（1999）^vは、「教師が頭の中だけで作ったものがカリキュラムになるのではない」と述べ、教師の思考と子供の実際、地域の現実を行き来しながら構築される教育課程の重要性を指摘し、伊那小に代表されるような探究的实践を評価している。教師が単独でカリキュラムを組むのではなく、子供の姿を出発点に、教師同士が協働して練り上げる文化こそ、教育課程を動的に更新する鍵である。こうした視点は本単元にも通じる。

本実践は、前年度の構成を参考にしながら、育てた米の出来や地域の状況、子供のつぶやきや興味の変化を丁寧に見取り、問いや活動内容を再設計していった。

提案した小単元「収穫したお米で地域へ発信」では、「和歌山をどう“推す”のか」「発信とは誰に何をどう伝えるのか」といった問いが自然に生まれるよう、教師間で繰り返し話し合いを行った。また、本単元の特徴として、「おにぎり・お弁当」といった生活に密着したテーマへと学びが展開した点が挙げられる。近生総研において、奈須氏は次のように評価している。

「米作りは多くの学校で実践されているが、有功東の実践では、収穫した米でおにぎりやお弁当を製作するなど、学習の先を見据えている。どの学級も一歩踏み込んだ学習を展開している。」

本単元でも、子供の興味や地域との関わりを反映させながら、単元を発展させる工夫を行った。これらの観点から、本実践のように既存カリキュラムを再構成し、実態に応じて練り直すことが、探究し続ける単元構成につながると考察する。

5.3 今後の課題と継続可能な単元構成に向けて

本単元は、地域や同僚の支援を受けながら展開されたものであり、多大な時間と労力を要する実践であった。この点から、すべての学校や教員にとって汎用性があるかどうかの一つの課題として挙げられる。

総合的な学習において探究的な学びを継続的に実現するには、学校環境や地域の協力体制が大きく影響する。また、限られた地域資源の中で単元を展開する場合や、実践を担う教員の熱意や専門性に依存せざるを得ない状況もある。こうした点から、教員の負担が過度に増大する可能性も否定できない。したがって、本単元を継続的に実施可能なものとするためには、学年や学校全体で協力体制を整え、実践内容を教員間で共有・蓄積していく必要がある。

中央教育審議会答申（2024）^{vi}でも、「教師の努力と熱意に対して過度な依存はできず、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合う必要がある」と指摘されている。以上を踏まえると、本単元においても、教員の負担を過度に増加させることなく、誰もが実践可能な形で展開するための工夫が求められる。今後は、単元の成果と課題を教職員間で共有し、地域と連携しながら継続可能な学習活動へと発展させることが、「探究し続ける学び」を支える基盤となると考えられる。

6. おわりに

2024 年、現任校を会場として近生総研が開催された。本大会に向け、学校全体で「子供は学ぶ力をもっている」という子供観を共有し、その姿を起点に探究的な

学びの可能性を継続的に模索してきた。

本実践を振り返ると、学級経営や授業づくりに一定の成果を見出せた一方で、「子供が自らの思いや願いを語り合う授業」の実現に向けた課題も明らかとなった。子供が安心して思考を綴り、語り、他者の意見に揺さぶられながら学びを深めていくには、日々の授業を丁寧に積み重ねる営みが重要であると再認識した。

「子供主体の教育課程づくり」とは、教師が一方的に構築するものではなく、子供の声や揺らぎを出発点に、教師も共に悩み、問い直しながら編んでいく過程である。本小単元で自然に生まれた「推すとは何か」「発信とは誰に届けることか」といった問いは、教師の意図を超え、授業の方向性すら変容させる力を有していた。

教師の願いと子供の思いが交差する場として授業が機能したことは、探究的な教育課程の意義を体感する契機となった。単元は“つくるもの”ではなく、“子供とともに育てていくもの”であるという認識が一層深まった。その実現には、教師同士が協働し、子供と学びの意味を共に探り続ける文化の醸成が不可欠である。

今後も、目の前の子供と地域の姿を丁寧に見つめ、「問い続ける学び」「関わり合いながら育つ学び」を軸とした単元構成および教育課程の在り方を追究していきたい。そして、子供にとっても教師にとっても「うれしい」と感じられる授業づくりを目指し、その実践を発信し続ける存在でありたい。

【引用・参考文献】

- i 中央教育審議会（2022）『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について—「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成—（答申）』中教審第 240 号
- ii 藤井千春（1996）『問題解決学習のストラテジー』明治図書
- iii 長岡文雄（1986）『子どもをとらえる構え』黎明書房
- iv 平野朝久（2022）『「はじめに子供ありき」の理念と実践』東洋館出版社
- v 奈須正裕（1999）『総合学習を指導できる教師の力量』明治図書
- vi 中央教育審議会（2024）『「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）』中教審第 251 号

【研究主題】

生活経験と教科の学びを往還する総合的な学習における『生きた知識』の育成

【副題】

～地域の魅力を探究する活動と、資質・能力の三つの柱の統合 和歌山の魅力発信シュークリーム開発大作戦を通して～

【学校・団体名】和歌山県和歌山市立有功東小学校

【役職名・氏名】教諭 山岡 大祐

1. はじめに

本校は「自らの世界を切り拓こうとする主体的・創造的な子どもを育成する」を教育目標に掲げ、特に総合的な学習の時間を学校研究の柱として位置づけている。本研究はその一環として、児童が和歌山の地域資源を活用したシュークリームを企画・開発する過程を通じて、現代社会を生き抜くために不可欠な「生きた知識」を育成する実践である。学習指導要領は生きて働く「知識及び技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養を三つの柱として一体的に育むことを求めている。しかし教科で得た知識が現実の課題解決に活用されず「不活性な知識 (inert knowledge)」にとどまる例は少なくない。本研究は児童の身近な生活経験を出発点とし、複数の教科の学びを関連付けながら探究活動を深めることで、知識が現実の文脈で機能する「生きた知識」へと転化する学びの姿を明らかにすることを目的とする。

2. 理論的枠組みと先行研究

本実践は、子どもの内発的な興味・関心を出発点とする学びが、深い理解と持続的な学習意欲につながるという立場に立つ。まずジョン・デューイは『経験と教育』において、教育は「経験の再構成」であり、学習は「行為の中の探究」によって深化するとした

(Dewey, 1938)。本実践は児童の「シュークリームを作りたい」という素朴な興味から始まり、地域課題の探究へと発展していく点で、デューイの理念と重なる。

木下竹次は『合科学習』(1928)において、生活に密着したテーマを軸に教科を統合することの重要性を説いた。本実践におけるシュークリーム開発は算数

(分量計算)、理科(生地・膨張)、社会(地域資源)、国語(表現・発表)、図工(デザイン)などを横断する合科学習である。



さらに藤井千春は、「問題解決学習のストラテジー」(1996年)で子どもの内面にある「願い」を大切に教育を説いた。本実践が東直子の短歌に共鳴した児童の「自分でシュークリームを作りたい」という願いから始まったことは、藤井の思想を体現するものであった。

3. 実践の概要

本実践は、総合的な学習の時間における「3風(3年生の風組)和歌山市シュークリーム大作戦」と題する単元である。児童がシュークリームを題材に地域資源を探究し、企画・試作・発表までを行うプロセスを通じて、知識の活用力や主体性を育むことを狙いとした。

単元計画(全体構成:全50時間+α)

単元名 「3風和歌山市シュークリーム大作戦」

単元目標

シュークリームの製造に必要な材料や工程を学び、実際に調理することによって製菓の基本的な調理技術を習得したり、和歌山市にちなんだ新しいシュークリームを企画・開発したりする活動を通して、洋菓子づくりのおもしろさや地域で働く人々とのつながり、仲間と協力して創造・改良していく良さに気づき、自分にできることを考えて取り組もうとすることが出来る。

単元の流れ

1. シュークリーム作りを学ぼう(10時間+α)

- ・シュークリームの基礎
(生地・クリーム・焼き方)の調理体験
- ・製菓の仕事や必要な準備・工程について調べる
- ・正確な分量や工程を踏む大切さを学ぶ

2. 3風オリジナル和歌山シュークリームを開発しよう (25時間+α)

- ・コンセプト開発 (ターゲット・テーマの設定)
- ・レシピづくりと試作
- ・試食・評価を通じた改良
(仲間や専門家の意見を活かす)
- ・「開発会議」でアイデアを精査し、完成度を高める

3. 開発したシュークリームの魅力を企業やお店に伝えよう (10時間+α)

- ・発表に向けたまとめと表現活動
- ・プレゼンテーション資料づくり
- ・地域の洋菓子店や企業への発表会

4. 和歌山シュークリームをみんなに振る舞おう (5時間+α)

- ・いちごを使ったオリジナルシュークリームを卒業する6年生と生産者に振る舞う。
- ・ふり返りと学びのまとめ

4. 実践の展開

本実践は、学習指導要領の改訂において示されている基本的方向性を踏まえたものである。すなわち、児童が主体的に学びに関わり、他者と対話しながら思考を深めていく「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すとともに、多様な背景や個性を有する児童が互いに学び合い、協働して課題解決に向かうことを重視している。また、学習活動が学校現場において持続的かつ実的に成立するよう、「実現可能性」の観点からも設計されている点に特徴がある。

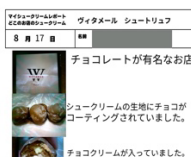
さらに、本実践は「自らの人生を能動的に切り拓く力」を児童に育むことを目的とし、地域社会や他者との関わりを通して「民主的な社会の創り手」としての資質を涵養することを意図している。これは、学習指導要領で強調されている「学びの当事者としての子供」「社会に開かれた教育課程」の理念とも合致しており、教育の個別最適化と協働の両立を目指す実践であると位置づけられる。

このシュークリーム作りを通じた単元学習を学習指導要領を意識した先行研究として一つの示唆を提案したい。

4.1 学習の契機

国語科で詩を味わう授業において、一人の児童が「春霞シュークリームを抱えゆく駅から遠い友達の

家」という短歌に関心を示した。これをきっかけに「和歌山市のシュークリームで有名な店を調べたい」という願いが広がり、単元の出発点となった。その後、社会科の学習の中で、市役所の見学などと併せて児童が見つけた洋菓子店に行き、見学やシュークリームの試食を行った。私はそこから、「シュークリームをもっと食べて調べてみよう」と提案し、児童はシュークリームレポートを作成して教室に掲示した。身近な題材が学びの出発点となったことで、内発的動機付けが高まった。

 シュークリームレポート	 シュークリームレポート	 シュークリームレポート
8月17日	8月17日	8月17日
シュークリームの生地にチョコがコーティングされていました。	チョコクリームが入っていました。	
小さくて可愛いかった	少し甘かったです。	
生地はうすかったです。		
クリームはチョコクリームでした。		
シュークリームを食べているというよりチョコクリームを食べているみたいでした。私は砂糖が苦いのでササッとシュークリームのほうが好きです。		

4.2 基礎的なシュークリーム作り

児童は「自分で作りたい」という願いを持ち、夏休み後すぐに第1回目のシュークリーム作りを行った。算数で材料を計量し、理科で生地が膨らむ仕組みを学びながら調理を行ったが、最初は失敗が多かった。その後3回の繰り返しを通じて技術を向上させ、保護者に試食してもらうまでに成長した。この過程は「経験から経験へ」と学びをつなげていくデュイイの思想に通じる。



4.3 地域資源の探究とコンセプト設定

市内の洋菓子店や商店街を訪れ、シュークリームを試食しながら地域の文化や産業に触れた。社会科で学んだ市の特産品と結びつけ、児童は「和歌山市を有名にするシュークリームを作ろう」とテーマを設定した。さらに玉林園の抹茶や山本農園の柿・みかん・レ

モン、小杉農園の紀州金時などの地域資源を調べ、生産者の出前授業も受けた。児童は「誰に、何を伝えたいか」を意識した開発シートを作成し、課題発見的に活動を展開した。



4.4 専門家との交流と学びの深化

基礎的な調理経験を積んだ後、パティスリーアンを訪問し、商品開発や顧客への思いを学んだ。この交流は児童の学びを一層本格化させ、特別な支援を要する児童も積極的に質問するなど主体性が高まった。試作と改良を繰り返す中で、算数の分数、理科の知識などが実生活に応用された。児童はハロウィンシューを開発し、隣のクラスに振る舞い、喜びと自己肯定感を味わった。



デコレーションの練習を経て



4.5 オリジナル和歌山シュークリーム作り

児童は地域農家と連携し、古代小麦や地元卵、紀州金時、柿、レモン、抹茶などを活用したシュークリームを開発した。グループごとに試作を繰り返し、教室に予定表や材料を整えたことで、自主的に活動する姿が見られた。

4.6 試食会議と本質に迫る学び

パティシエの仕事と同じように、試作品を持ち寄り試食会議を行った。この試食会議は第27回近畿地区小学校生活・総合的な学習教育研究協議会和歌山大会の本時としても授業を行った。そこで児童の一人が

「砂糖やバターを増やせば美味しくなるが、紀州金時の良さを伝えられないのでは」と発言し、地域資源の活かし方という現代社会が抱える本質的課題に迫った。この授業は奈須正裕氏にも参観され、その後の講演会で「中核概念に迫る発言があった」と評価された。後に教育情報誌「内外教育」のコラムでも本単元の学習活動の良さや子ども達の本質に迫る学びになっていたと取り上げていただいた。



4.7 発表と集大成

児童は完成品を生産者や地元企業にプレゼンテーションを行い、試食してもらい試食発表会を開いた。そこで完成させた各グループのオリジナルシュークリームに対するフィードバックをいただき、これまでの達成感や成長を感じ、改良点を知り、次への意欲を高めることができた。



3学期には保護者を招いた発表会や6年生への卒業祝いとしてシュークリームを振る舞い、喜ぶ6年生との交流を経て、達成感を得ることができた。それぞれの様子は、地元新聞社やテレビ局にも取材を受け放送された。



5. 成果と考察

本実践を通して、児童の学びと成長において、以下の3つの重要な成果が確認された。

5.1 「生きた知識」の育成

児童は教科で得た知識を実際の課題解決に活用し、不活性な知識を活性化させた。算数の分量計算や理科の実験原理を料理に応用する姿は、知識が現実機能することを示していた。

5.2 すべての子どもの参加と成長

興味関心を出発点にした学習は、特別な支援を必要とする児童も含め、全員の主体的な参加を促した。振り返りには「人前で話せるようになった」などの記述も多く、内面的成長が確認できた。ここで前述した試食会議本時で本質に迫る発言を行った児童のふりかえりを一部抜粋する。

「試食会議をして」

私がいいなと思ったことは、さつまいもバタージャムがとっても甘くて美味しかったことと、生地がしっかり焼けていて美味しかったことです。改良点は、生クリームは少し甘くしてもいいかなと思う。けれど、さつまいもジャムのさつまいも本来の味がわからないからジャムの砂糖の量は減らしてもいいのかなと思いました。自分の意見を会議で話すことができて良かったです。

5.3 探究力と自己肯定感の向上

児童は自ら問いを立て、試行錯誤を重ね、地域やプロの方々に認められる経験を通して自己肯定感を高めた。発表会では「自分たちが地域の役に立てる」という実感が芽生え、次の学びへ向かう意欲が強まった。試食会議で試作グループとして臨んだ児童のふりかえりも一部抜粋する。

私は、今回の試食会議でさつまいもシュークリームを出しました。私はたくさんの人が見ていたので発表する時に緊張しました。だけど、みんなに「美味しい」「このさつまいもジャム美味しい」などいろいろ言ってもらえて嬉しかったです。みんなの意見で、「次はそうしよう」「こうしたい」とグループで新し

く考えることができました。次は、「生地をさつまいもぼくしてみる」「おいもをごろごろしたクリームにしてみる」「おいもらしさが伝わるような工夫をする」このようになりました。試食会議で新しいアイデアが生まれてよかったです。

この頃になると各グループは、小学校高学年のように実によく能動的に活動することができていて、教師の指示がなくとも自分たちで考えて行動し、相談があれば仲間や教師に尋ね、本物の洋菓子店のパティシエのように動くことができていた。したがって教師は全力で子ども達の様子を見取り、コーディネートやファシリテートを行い、活動をチェックしてはフィードバックを存分に行うことができた。

6. おわりに

本研究は、児童の願いを起点とする探究活動を通じて、教科の学びと生活経験を往還させながら「生きた知識」を育成できることを明らかにした。児童は自ら問いを立て、調査や交流を重ねる中で知識を意味づけ、実生活に活用する姿を示した点に教育的意義がある。さらに、地域資源を活用した学びは、社会的課題を自分ごととして捉え、協働して解決に向かう姿勢を育成する契機となった。今後は、より多様な地域資源を取り入れ、児童が変化の激しい社会を生き抜く資質・能力を培う実践へと発展させていきたい。

【引用・参考文献】

- Dewey, J. (1938). Experience and Education. The Macmillan Company. (松野安男訳『経験と教育』岩波書店, 1999年)
- 木下竹次 (1928). 合科学習. 牧野出版
- 藤井千春 (1996). 問題解決学習のストラテジー. 明治図書